

第2回横浜市子どもの貧困対策に関する計画推進会議 生活・自立支援・子どもの育ち分科会 会議録	
日 時	平成29年3月8日（水）19時35分～20時30分
開催場所	ワークピア横浜2階「くじゃく」
出席委員	<p>（有識者、支援団体等）（50音順、敬称略）</p> <p>沖野 真砂美（横浜市主任児童委員協議会 南区代表）</p> <p>小園 弥生（（公益財団法人）横浜市男女共同参画推進協会 男女共同参画センター横浜南 管理事業課長 ）</p> <p>田邊 裕子（横浜市社会福祉協議会 地域活動部長）</p> <p>濱田 静江（児童家庭支援センターむつみの木 センター長）</p> <p>松橋 秀之（社会福祉法人 日本水上学園 園長）</p> <p>宮下 慧子（母子生活支援施設カサ・デ・サンタマリア 施設長）</p> <p>村田 由夫（一般社団法人横浜市私立保育園園長会 会長）</p> <p>湯澤 直美（立教大学コミュニティ福祉学部福祉学科 教授）</p> <p>（行政職員）（機構順、敬称略）</p> <p>米岡 由美恵（港南区こども家庭支援 課長）</p> <p>高岩 恭子（横浜市東滝頭保育園 園長）</p> <p>開地 秀明（こども青少年局 三春学園長）</p> <p>川尻 基晴（こども青少年局 南部児童相談所長）</p>
欠席委員	0名
傍聴	0名
議 題	1 今後の計画の推進について
決定事項	

<議事>

<p>（開会）</p> <p>（事務局）一緒にモデル事業をやっていただきます社会福祉協議会の田邊部長お願いします。</p> <p>（田邊委員）私どもは一緒に取り組ませていただくことになりました、社会福祉協議会でございます。そもそも一番下の「29年度の取組」というところの図を見ていただくと、その中に「地域における子どもの居場所づくりの相談窓口」ということで、区の社会福祉協議会となっておりますが、子どもに限ったことではなくて、さまざまな地域の取り組みのご相談を受けておりますので、子どもだけではないのですが、今回は本当に地域の方々の子どもの食堂や子どもの居場所に係る意欲といえますか、こと子どものことになると皆さんすごく熱心になれることがよくわかりました。今回一緒にというお話をいただく前に、もう既に子ども食堂や居場所は日々立ち上がっておりまして、皆さんの意欲の高さを感じるところでございます。きのうは共同募金の配分委員会がございまして、地域の方々や学識の方々と社会福祉協議会の共同募金の使い道についてお話しする中で、皆さん、ほかの事業はそうでもないのですが、子ども食堂になると目の色を輝かせながら、積極的でして、</p>
---

終始子ども食堂の件で話が始まり話が終わったような、そういうことで、純粋にお子様のことだと皆さん本当に、何とかしたいと思っていらっしゃるのだなということがよくわかりました。社会福祉協議会は今回そういう2区の取り組み、その機運のある磯子区に関しては、今まで実は1カ所も子ども食堂が地域の中になかったのだそうです。それを地域の方にお話ししたところ、それはまずいということで、地域の中でも機運が盛り上がったので、ここ2回ぐらい、皆さんとワークショップをやりながら、どうやったら立ち上げられるだろうか、何をしようかという話し合いを地域の方々とされているところだそうです。そういうところを私どもが記録したり、あと支援しながら、行政につなげて、今後のサポートモデル事業の、例えば記録であったり、あとマニュアルのようなものであったり、そういう形になっていけばと考えています。モデル事業のもう一カ所、港北区のほうは、既に子どもの事業が非常に盛んでして、「ココマップ」というマップの取り組みもしていっていらっしゃいますし、そういう中でたくさんの居場所ができています。その中の取り組みを、新たなものを立ち上げるというよりも、もう一歩先に進んだものの情報がとれればいいなと思っておりまして、一緒にやらせていただきたいと思えます。行く行くは18区の社会福祉協議会を窓口にしなから、地域の方々と子どもの居場所づくりであったり、子どもの生活困窮であったり、いろいろな課題と一緒に取り組んでいけるように発展していけばいいなと思っています。

（**沖野委員**）私がお話しできるのは、地域の声だけなのです。子ども食堂と今、テレビだったり、皆さんがいろいろなところでお話をしてくださいますので、すごく地域の中で知られてきました。ただ、子ども食堂というものに関して、貧困だったり、生活に何か困難を抱えた家族が行く場所なのではないかという、そんなイメージを持たれてしまっているのがすごく残念なところですが、またいろいろなパターンがあると思うのですが、大きな団体さんや地域全体がイベントごとのように行う子ども食堂というのは今あるのですが、こちらは大変周知しやすいのです。皆さん来てくださいという形でお声がけするので、大変多くの方たちが来てくださいます。また、その来てくださった方たちに対応できるだけの食数を用意できるというメリットもあるのでいいかと思えます。私たちは地域の中で、そういうところで皆さんと知り合って、その中に何か抱えたお子さんがいるのかなという、そんな出会ってから、気づいてつないだり、見つけてつないだりというのが、私たち主任児童委員の役目だと思っています。ただ、それとはまた違うパターンで、地域の中で思いのある人たちが集まって、何かできないかな、やろうかなというパターン。こちらは本当に、場所から考えますと、また資金も大変です。そうすると、団体さんに比べて、食事の量は余り用意できないというところで考えてしまうのです。そうすると、どうしても自分たちが思ったときに、あの家庭にとか、あの子にという、そういうふうな考えが先行してしまうのです。そうすると、周知の仕方が大変難しくなっているというのが実際に、両極端なパターンですが、これが今の地域の中の現状です。これからいろいろな方がこういうことをやってみたいということで、行政のほうにご相談があるかと思うのですが、同じ問題に対してもそれぞれ支援の仕方が違うということだけはわかっていただきたいと思えます。また、でき上がった後の細かいフォローもきちんとしていただきたいと思えますので、よろしくお願ひします。

（**事務局**）我々も区社会福祉協議会さんや区役所を通じて、子ども食堂の実態把握を行っているところですが、さまざまな形でやられていまして、ただ貧困のご家庭だけを対象にしてしまうと、かえって行けなくなってしまうという声も聞いています。そんな中でどうやって必要な子どもに届け

ていくのかというのは、広く門戸を開いてしばらく継続していく中で見つけていくものかなとも感じております。それぞれに応じた支援を行わなくてはいけないということで、今回モデル事業の中で支援方策のあり方を考えていきたいと思っております。

(小園委員) 今年度当センターで行った市民協働事業で、NPOの教育支援協会とご一緒に、夏休みと冬休みに食事も含めた「子どもの居場所をつくろう」という事業を行いました。それで、先日、反省会を団体の方と、ボランティアとして継続的にかかわってくださった方たちと行ったのですが、今年度初めてでしたので、子どもの数よりもボランティアをしたい人のほうが多く集まってしまって、どうしたら子どもたちが来てくれるかというのが課題でした。生活に困難な子どもだけではなくて、つなぎ手になるようないろいろな子どもが来てくれればと思ったのですが、そういう中で、ボランティアをやりたい人はとても多いと。それで、そのボランティアをコーディネートする集団が、NPOは既存の事業で忙しいので、そのことで予算なりチームをまた別につくらないと、できないわけなのです。中学校区ぐらいで子どもの居場所が立ち上がっていくのがいいのですが、そこで地域の人たちがコーディネートもできるようなチームをつくってもらいたい、そのためにこの協働事業が役立てばと、協働先のNPOの方たちもおっしゃるのです。ではだれがコーディネートするのか。男女共同参画センターの職員なのか。私たちのセンターもいろいろな仕事をしていてなかなかマンパワーが十分ではないのです。しかし、継続性が大事な仕事ですから、これは覚悟を決めてやらないといけないのだらうと思います。ボランティアはやりたい人がたくさんいます。だけど、それをまとめて継続していくために、コアになっていくチームを、ちゃんと税金をかけて、どう担保していくかということをご一緒に考えていただければと思います。そういう態勢があれば、うちのセンターとしてもうちちょっと本腰を入れてかかわれるかなとも思っています。よろしく願いいたします。

(田邊委員) ボランティアのコーディネートというか、なかなか難しいのですが、中間支援的にコーディネートすることはできるかなと思いますし、サポートすることもうちのほうでもできると思っています。ご相談いただければ、いろいろな方が地域の中にもいらっしゃるし、もちろん職員もいますので、ご相談しながら進めていくことはできると思います。子どもの居場所づくりサポートモデル事業ということで、今回これを受けさせていただく中で、子どもだけではなくて、地域みんなの居場所になったり、あとそれが、先ほどのお話がありましたが、子どもたちが将来に向けて地域の担い手として育っていただけるような福祉教育の現場であったり、いろいろなものにつながるのかなと思っているので、そういう取り組みも引き続きやっていきたいとは感じています。

(米岡委員) 先ほど沖野委員がおっしゃった、両面性があるというか、私たちが本当にここで食事をしてほしいご家庭だけを呼んでしまうと、何か子ども食堂イコールかわいそうな子たちが来るところみたいになってしまうという。そこは私も区としてもすごく悩ましいところで、ぜひあそこで子ども食堂をやっているのだから食べに行してほしいなと思うのだけど、その子たちをそこにつなぐまでが区としてもすごく厳しさを感じているところがあります。私たちが対応しているお子さんたちの中には、たった100円でも持っていくことが困難なお子さんもいますので、その辺は主催者の方たちと、この100円を持ってこられないのを、どうやってほかの人たちにわからないまでも、何とかこの子が100円なりのお仕事をした形で食べさせてもらえないかとか、そういうことを調整したり

もしているケースもあります。ですが、なかなかそういう家庭は行かせることができないというところがあって、確かに大勢で豚汁とおにぎりみたいな、よくお祭りでやるようなことをやると、そういう子が並んでいると「あ、よかった」と思うのですが、その辺、本当に難しいと思います。

（事務局）3月21日のフォーラムでお話しいただく豊島区の栗林さんも、そういった子どもには手伝ってもらって、そうすると周りの親御さんたちも、すごく上手ねとほめて、自己肯定感も育ったよというような話もして下さったこともあるので、今回もそういう話も出るのかなと思っています。

（濱田委員）実はコミュニティーサロンさんというところを開催させていただいて2年目を迎えているのですが、去年の暮れから実はある団体から少し寄附をいただきまして、全然制度に乗らない勝手な事業をさせていただいています。それを決めつけないので、朝の11時から食事をいつでもとることはできますというふうに提示しています。それから夜は8時から8時半ぐらいまであけています。実は学習支援をしたくて、ご飯を100円にすれば来るかなともくろんでいたのですが、全然違いました。学習支援の登録は今10人を超えて一生懸命来てくれているのですが、食事は食べても食べなくてもいいよと子どもに選ばせたら、うちの「おさん」のメニューがお魚中心なものですから、「魚、嫌い」と言って、食べないと言って帰ってしまう子もいます。気に入ったメニューを、毎日うちはあけているので、昼も夜も多彩なメニューを提示していますので、では食べたいときに来てねという感じで、ちょっとくろみが外れたなど。でも子どもが選べる場所であってほしいというのがありますので、その辺は、月曜日から金曜日までとにかく相当な数の地域の人が、多いときは560人ぐらい、少ないときで420～430人、もうこれ以上利用者がふえると危ないかなというぐらい、おなかの大きいお母様や子育て中の親子であったり、それから一番大きい方は94歳のおひとり暮らしの自立したジェントルマンのおじいちゃまであったり。子どもの居場所だけではなくて、そういう地域の人たちが自分の勝手な、「おさんで会おうぜ」というのを合言葉にしてうまく利用してくれているから、子ども食堂と何も名づけなくてもいいのかなというのがちょっと気づいたところです。それよりも社会的養護の種類の多さにびっくりしています。単身赴任のご家庭が結構多いのだなと思いました。そうすると、ひとり親ではないのだけど、お父さんは沖縄に行っていて半年に1回しか帰ってこない。そうすると、お母様が複数の子どもを抱えて、相談相手がいない。どうしていいかわからないから、ついつい親子で距離が近くなってしまうのを、「おさん」に来ることによって少し距離を置くような関係がつけれるというような、思いのほか学習支援や子ども食堂をやっていると感じたことです。何もかわいそうな子どもはそういう形ではないのだと。名古屋なんかだと、毎週末、土日に帰ってくるから会えるのだけど、いろいろな形があるのだなというのは始めてみてわかったことです。だから常にあけているメリットは、これは大変なことなのですが、ただそこに地域の雇用がまた新しく生まれているので、関心を持っている思いのあるお母様が、「私が雇っていただければ、子どもが学校に行っている間だけ、今度はお店番になります」と。

日枝小学校という、外国につながるお子さんもたくさんいる小学校が隣組であるのですが、そこでアフタースクールを頑張ってやっつけようとしているのです。その利用者は60人とか80人と90人とかという子どもを週1回教えているのだそうです。それでも学習に追いつけないお子さんを日枝小学校が一生懸命つなげてくれようとしています。それと、「おさん」という伝説があるのはご存じでしょうか。商店街で吉田新田のときに人柱に立った女の子の伝説の話は小学校3年生の子は、あの辺

の地域の子は全員学ぶのです。そうすると、小学校3年生の子は必ず「おさん」に来て確認するのです。そうやってまた地域の人が説明できる場所があると。それを調べていって今度は、いついつ発表するから来てねと言うと、父兄でないのに全員で私たちがもううるうるしながら研究発表を聞きに行くわけです。そういう制度ではない緩やかな地域との関係はとてもありがたいかなと思っています。ただ、月曜日から金曜日まで、朝の9時半から職員を二部制にして張りつける、これはもう本当に大変です。学生さんも気ままです。明治学院という、明治大学のボランティアさんが来てくださっているのですが、5人も学習ボランティアがいるのに、子どもがだれも来ないという日があるのです。もう本当に申しわけないなと思っています。あと3年後にもうちよっといういろいろなものがぐちゃぐちゃになりながら、元気な子どもたちがそこで生まれてくるといいな。それで、その子たちが先輩として後輩の面倒を見られるような姿が3年後にあれば大成功かなと思います。だから、やらせてもらってよかったなと思います。

(事務局) 常にあいていて、いつでも行けるというのはすごく子どもにとって安心感があるかなと思います。

(濱田委員) そうです。ただ、もう狭いので、子どもが15人来るとちょっと身の危険を感じます。でも怒られないのですごく楽しそうです。

(事務局) 市内の子ども食堂もあえて子ども食堂と言わないとか、だれでも来られる多世代交流型でやっているところもありますし、そのあたりは我々がこういうのをやったらというのではなくて、地域の中で自分たちがこういった活動をやりたいという盛り上がりを中心に支援していきたいと思っています。ぜひさまざまな事例を情報共有しながら、いいところは取り入れていっていただく形で進めていきたいと思っています。

(高岩委員) 保育の現場ということではないのですが、私が一番初めに子ども食堂と聞いたときに、単純に自分も仕事をしている身でもあるけど親でもあるので、育ち盛りの子どもは温かくておいしいものをたくさん食べたいよなど、親心ではないけど、そういう気持ちで初めこういう立ち上がりのところを見ていました。たくさん話を聞いたり、こういう会議に出させてもらって、食べるだけではなくて、本当に居場所と継続性がすごく大事で、保育園は子ども食堂をするわけではないですが、保育園も同じで、継続してずっと支援していくことが大事なので、キーワードとしては継続と居場所というのが、どこにでもつながっていく支援なのだなと思いながらいつも聞いています。

(濱田委員) 南区では実は不思議なことが起きていて、うちがそういう、どんと構えて、いつでもあいているところがあるわけですね。そうすると、それはフォーラム南太田が協働事業として日曜日のイベントをやってくださったので、日曜日にうちがあける必要はないなというのがまずあったのです。逆に、月曜日から金曜日まであけていることによって、いろいろなところがいろいろな試みをややすくなったかな。活動ホームが実は3月から月に一遍、だれでも来てもいいよというような子ども食堂を始めくださるのです。だから1つ緩やかな法人がどんと後ろで構えて、何があってもいつでもあいているし、振るところは振っていいよと言っていると、いろいろな人たちが生き生きと自分たちなりの活動を考えて、地域を支えようとしてくださる試みがたくさん今始ま

っているので、意外とそれはとてもすてきなことが起きるのだなと思っています。子どもが自由に食べられる場所は近いほうがいいわけだし、できればそこにいつも顔見知りの方が必ずいるような場所が本当はいいのだと思うのです。距離感がとても大事で、余りおせっかいをやられたくないし、干渉もされたくないし、評価もされたくないしというところをご理解して、だからボランティアがかかわるというのはとても難しいと。その距離感をどなたかが学ばせていただける機会があるといいと思うのです。ただのコーディネーターだけではその辺は難しいかなと。振り先を児童家庭支援センターに、もっと重症化した人はつなぐとか、さっき広げるとかとおっしゃいましたが、みんながつながることのお役に立てているかなというような感じがいたしました。

（事務局）田邊部長から話があったのですが、昨日、磯子区で子ども食堂をつくろうというワークショップの2回目がありまして、大体区で何かやろうといういつも顔見知りというか、決まった方が参加されるのが多い中、この子ども食堂は今まで区につながっていないような方が大勢参加いただいたということで、地域活動の人材の広がりというか、地域福祉の部分の拡充というか、何かそういったところにもうまいことこの事業が発展していくといいのではないかと考えているところです。

（松橋委員）先ほど、全体会が終わった後に村田委員から質問をいただきました。その質問は、施設で生活していた子どもたちが不動産屋さんにもいろいろと手続の方法などを聞いたという話で、そういうことは施設ではやっているのですかという内容でした。私の施設のベテランの職員は、「究極のアフターケアはインケアであり、在園時代にきちんと社会的な経験を教えていくことが大事だ。」ということを行っています。私もそのように思っています。以前は、服などは問屋さんで大量に買ったりしましたが、今は職員が子どもと一緒に買いに行っていますし、中高生などは1人でも買いに行ったりしています。ATMの使い方なども教えています。それからアフターケアの施設、ブリッジフォースマイルなどの支援団体の方、施設で生活をした当事者団体である「ひなたぼっこ」の方などが、施設を出た後に困ったとことが起きた時の対応などを集めた冊子をつくって、子どもたちにくださっています。しかし、今回のアンケートの結果を見ると、実際は見えていないのかなと思いますし、本に書いたものと実際やるときの違いみたいなのがあって、なかなか難しいのかと思っています。施設にいる時には、職員と一緒にいてやってたりしているのですが、だれかが一緒にいるのと実際に1人でやる場合とはまた違うのかなと思います。先ほどごみ捨ての話もありましたが、私の施設では高校3年生になると、職員宿舎の空き部屋でひとり暮らし体験をさせています。自由に寝て、自由に起きて、とにかく学校は遅刻しないで行きなさいというような経験をしています。その時に、ごみ出しのことなども経験させているのですが、やはり施設の中のことなので不十分なのだろうかと思われ、もう一度きちんと考えていかなければいけないと感じています。

あと、施設を出て働いている人たちの収入についてですが、10万円～15万円、あるいは25万円位と人によってそれぞれ違っています。私たちの施設でも卒園した人たちを招いて毎年新年会をしており、中学生、高校生に対して、社会に出て働いている子どもたち、あるいは大学とか専門学校に行っている子どもたちが、主に生活の費用のことを話してくれます。在園している子どもたちは、お給料をどれくらいもらっているか、手取りになると少なくなってしまう、残業があるなしで全然違って来る、特に夜勤なんかある人たちは結構給料が良かったりするなどの違いがあるということ、卒園生の話を聞きながら感じているところです。

きょうの職員会議の内容が印象的だったので話します。1つは塾に行かせていただけるようになって非常にありがたいということです。職員会議で中学2年生、3年生の子どもたちを塾に行かせたいという提案が担当職員から上がってきました。塾の費用は、場合によっては年間25万円とか30数万円かかります。横浜市の児童養護施設の子どもたちは、このように塾に行って勉強させてもらえるということができ、非常にありがたいと思います。今回、高校3年生の子どもが、市内の商業高校に行っていた子なのですが、税務の国家公務員の試験に受かりました。この子の場合は、高等学校に行きながら、さらに公務員試験のための予備校に行くことができたのでした。また、高校3年生の子どもたちが今、運転免許を取るために新潟の方に合宿の教習所に行っており、今の施設の子どもたちは、いろいろな面で恵まれているということを改めて感じています。

もうひとつは児童手当のことです。施設で生活する子どもたちは、以前は親が受け取っていましたが、今は子ども本人が受け取ることができるようになりました。この児童手当を将来のために貯金できるというのが非常に私たちにとってはありがたいことです。2歳から高校3年生までいたら100~200万円と貯められ、これが本人の自信にもつながるし、進学費用の準備となります。ただ、途中で親の所に家庭復帰する子どもたちもおり、場合によってはせつかくためのお金が親に使われてしまうこともあります。ずっと施設で生活することは、場合によっては良いことではないかもしれませんが、お家に帰って親と一緒に生活できれば一番いいのかもしれませんが、このようなギャップというものを施設で子どもたちを見ながら感じているところです。

あとは、先ほどの子ども食堂の話聞きながら、食堂の活動をしたいというボランティアさんがたくさんいらっしゃるということを聞いてびっくりしました。今、保育士さんが足りないとかという中で、ボランティアをしたいという人が、子どもに関心を持ってくださる人がいっぱいいるのだなということは非常にありがたいと思いました。子ども食堂の話をいろいろなところで聞くと、そこで大人や大学生と子どもたちが出会って、ロールモデルという言葉が先ほどの報告にもありましたが、そういうところで良い大人の人と出会っていくことが子どもたちにとってとても大事なことだと思うのですが、そういう具体的な事例があったら教えてほしいとお話を聞きながら感じました。

私たちの施設に入ってくる子どもたちは、7割、8割は何らかの虐待を受けています。身体的虐待とか性的虐待という大きな虐待を受けてくる子も大変だと思っていたのですが、ネグレクトと心理的虐待というのは、じわっと子どもたちに影響を及ぼしていると感じています。身体的虐待も性的虐待も子どもたちのつらさというか傷は大きいと思うのですが、いずれにしても自己肯定感を確立していくことは難しいのだなということを感じています。親が子どもに十分な愛情を与えられないなら、ほかの大人が代わりに愛情を注いでいくことが必要です。保育園や幼稚園の話がありましたが、本当に全員の子どもたちが保育園か幼稚園に乳幼児期に通えるということが、子どもの成長にとってとても大切なことであることを思わせられました。

(村田委員) 保育園というのは存在する地域によって別々というふうの特徴があると思います。たまたまこの前会合があったときに、ある保育園でございまして、障害をお持ちのお子さん、この4月に小学校に入るとのことですが、ひとり親家庭でございまして、お父さんは仕事を持っている、保育園では7時から8時まで13時間保育を受けている、こういう状況でございまして、学校に行きますと、そんな時間はないですね。時間帯がいろいろと切れるわけです。そんなわけで、そのお子さんをどうサポートするかということで、療育センターを初め関係の機関の方々が集まって、いろいろな意見交換をしたわけです。そのときに、では保育園に行って、そのお子さんの様子を実際

に關係の皆さんが集まって見させていただけないだろうかということになりまして、それでお父さんに許可をもらって、關係の機關の人たちが自分の都合のとれる時間にいろいろと見て、大変参考になったということで、保育園のほうとしても、卒園して終わりではなくて、その後のサポートもしていかなければいけないねという。それは關係の団体のかかわりがあって初めてできることなのですが、そういう方向になったということなのですが、私が印象に残りましたのは、お父さんの勤務時間がございまして、お父さんは早いので、子どもの登校の時間は合わないわけです。自分のうちから学校までの距離が大体5～6分だそうです。この5～6分の送迎が今のところ全くできなと。そこをどうするかというのが大きな問題になっているみたいなことがありまして、いろいろとそのかかわりで掘り下げていきますと、保育園としても、卒園していただければもうそれで關係が切れるとか何かということだけではなくて、今後も持ちたいねという、そういう場面もいろいろと出てくるのかなと思っています。ですから、それぞれの保育園はきっといろいろな問題あるいは課題を抱えていらっしゃるかなと思うのです。

あと食事の件なのですが、東京の保育園でしたか、お母さんがお迎えに来るときに、保育園の横の棟で子どもたちがお昼を食べたものを、温かいものをつくって、お母さんも一緒にそこで食事ができるというふうなことをやっていたところをたまたまテレビで見まして、言われてみればとても大事だなと思うのですが、そういう気持ちというか、アイデアが出てくるというのがすばらしいなと思いました。そういう点ではもっともっと保育の機能とか役割とか、いろいろと考えればもっともっと広がるなという感じを抱いているのですが、それがこういうさまざまな施策と結びついていけばすごくよろしいのかなと思ったりします。

(湯澤委員) 自治体でこのような調査をしていただけることは本当に意義が大きいと思いますので、改めて感謝申し上げます。きょう資料5-7を拝見しながら、1つ貴重なところで、28ページで生活保護の方が14%おられたというところ、これは回答者の中からすると決して低くないといえますか、重要な比率が抑えられたのかなと思っています。私も他の自治体で養護施設を退所した方々への貸付金の事業に携わらせていただいています。退所して何年かたっていくうちに、精神的に負荷がかかって日常生活の維持が難しくなるという場合もありますし、こういう調査の中でより困難な状況に置かれている方々がキャッチできたことを、もちろん施設も十分やっただけしているわけですが、どんなサポートを施策としてつくっていけるかというところはとても重要なと改めて思いました。またヒアリング調査を実施していただいたことはとてもよいことだと思ひまして、またこれも他の自治体なのですが、私も今、ひとり親家庭の子どもたちのヒアリングをさせていただいているのですが、話をする事で自分のこれまでの歩みや今取り組んでいることを再評価できるというのでしょうか。そういう場が二十前後とか二十以降、そういう時期の若者たちに必要なのではないかと。他人を写し鏡にしながら自分を語って、またそこで整理してあしたまた歩めるという場にもなり得ると思ひますので、ぜひそういう意味でのヒアリングの活用もまたしていただけるといいかと思ひます。クオカード5000円ぐらい出すとヒアリングに応じたいなど、継続的にでも応じたいというふうになりますので、そんな工夫もあるといいのかもしれない。

あと、きょうはこの分科会とは違ひのかもしれませんが、計画の中の一部に子ども・若者の実態調査も入っていたように思ひますが、これもまた全く違ひ自治体で、高校生調査を昨年度実施して結果を見ていたら、アルバイトの比率が少なからずあって、また困窮世帯の方のほうは、アルバイトを学校の給食費とか交通費とか、学校にかかるお金に使っている比率が高いというのが出てい



たりするのです。児童養護施設のお子さんでもお話を伺ったりすると、高校の時代から部活は我慢して進学のためのアルバイトしていたのだというような、地域によってはそういうこともあったりしますし、あと卒業して専門学校、とりわけ大学よりも夜間専門学校とか、専門学校のほうがより厳しいわけですが、またそこでもアルバイト漬けという形があったりする一方で、そのアルバイトが、今大学生もそうですが、本当に若者アルバイトがないと産業が回っていかないというのでしょうか。飲食店とか、とりわけ夜間の飲食店とか、それで年末年始はまた休めないで働き尽くめでシフトに入れ込まれてとか、その中でブラックみたいな働かせ方もあったりするというようなこともありますので、単に中退予防といっても、そういうところも見ていかないと、解決が難しいということもありますので、ぜひそういう若者のアルバイトの実態把握や、そこに対して何ができるかといったことも考えていければよいのかなと思いました。

（事務局）ありがとうございます。本当に貴重なご意見をいただいたと思っております。このアフターを考えていく中で、経済局とかと連携しながら少しそのあたりも見ていく必要があると強く思いました。

（宮下委員）私たちはお母さんと子どもの施設なもので、出るときはお母さんと一緒に出るのですが、出た後、特に外国籍のお母さんの子どもたちが、高校とかに行っている、リベンジポルノに遭ってまた逃げなければいけないとか、そういうときに外国人であるがゆえに警察との対応とかができないとか、そういう難しいことがあちらこちらで起こっています。特に子どもが学習できない、勉強できないというようなことで、どこに原因があるのかということとかがお母さんがわからない、またきちんとした、調べるとかということもできないので、結果的にはアフターとして職員が出向いてどこかにつないだり、一緒に行ったりして、その子どものこういう障害があったとか、こういう傾向があったとか。またさっきのリベンジポルノでしたら、せっかく養護で高校2年まで行ったのに、それをやめて、今度は就労のほうに移行していかなければいけないとかというようなときに、せっかく積んできたのにという思い、全部やめなければいけなかったりして、まず逃げるということを学校は中心に考えられるから、そういうあたりが困ったことかなと。ひとり親で、特に外国籍のお母さんに関してはもう少し何かできないものかなと思ったりしております。

（小園委員）女性の就労支援を日々行っている中では、就労の前段階の支援がもっとも必要だと思っております。健康の課題とかメンタルヘルス、自己肯定感というか、安全感を持ったことがないという若者や女性が多いと感じています。子どものころからいつも安全感が持てない、そういう環境にずっと置かれていると、何か自己表現しましょうとか、安心・安全の権利が人にはありますと言っても、一体それは何のこと？ となってしまうのです。なので、人といると何か楽しいとか、自分がいい感じになって次に一步踏み出してみようと思えるみたいな感覚をまず持ってもらえないと、就労にはとても一步踏み出せません。そのためには安心・安全な場づくりを、一緒に食べるのもいいでしょうし、私たちのセンターでは今シニアの女性が世話人になって「おしゃべりハンドメイドの会」というのを月に一度ずつ行っているのですが、そういう何か手を動かしておしゃべりするみたいな場も、多世代の方がいろいろと集まってくれて、子育て中の方とか、障害児を育てている方とか、介護疲れの方とか、いろいろな方がふらっとお越しになったりします。地域で1人で住んでいらっしゃる高齢の女性、男性とか、「こういうのがあるからお母さん行ってみて」と子ども

に言われて、ずっと1人でいた方がそういう場に見えたりするのです。そうすると、何か人と会って話ができほっこりした気持ちになってちょっと来てよかったみたいなことをおっしゃって帰られます。明日への活力みたいな感じでしょうか。

ひとり親の方もそうではないかなと。元気な方は、ひとり親サポートセンターにちゃんと行けると思うのです。そうするとちゃんと相談員がついてくれて、スーツも借りて面接に行けたりする、そういう人は今少数派ではないかと思います。それ以前に、心身両面で健康面がなかなかきびしい。正規雇用の私たちは毎年健康診断があって当たり前とっていますが、何年間も健康診断なんて受けていないという人はとても多いのです。そうすると病気も早期発見できないし、もうぐあいの悪い状態が当たり前となると、何を困っていますかと言っても、困っていませんということになります。困っている状況がどういふのかわからないということかなと。なので、就労の手前の支援というのがもっと健康を含めて必要だなと感じています。男女共同参画センターでもかつてシングルマザーの就労応援フェアを行っていましたが、健康応援フェアとか敷居の低い、そこでちょっとおやつや食事、お茶も出たりする場なども喜ばれるだろうと思います。

(事務局) ありがとうございます。本当にたくさんのご意見をいただいて、子どもの貧困対策はさまざまな問題が絡まっていて、総合的に解決していかなければいけないと感じた次第です。健康の取り組みについても、次回には横浜の取り組みの状況も説明していければと思います。本当にきょうは皆様からたくさんのご意見をちょうだいしまして、ありがとうございます。このご意見を整理させていただきまして、計画を推進していきたいと考えております。

(閉会)

(事務局) 事務局から2点ご案内をさせていただきます。1つ目ですが、この会議や計画に関することは、適宜お気づきの際、事務局の企画調整課までご連絡いただければと思います。また、2つ目は、冒頭でもご案内してございますが、本日の会議の記録については、発言された方の氏名を含めてホームページ上で公開していく予定です。記録がまとまりましたら、委員の皆様にご確認をお願いしたいと思っておりますので、よろしくお願ひします。

それでは、きょうの貧困計画の会議は終わりたいと思います。長時間、本当にありがとうございました。

#### 配布資料

- ・ 資料1 横浜市子どもの貧困対策に関する計画推進会議 委員名簿
- ・ 資料2 横浜市子どもの貧困対策に関する計画推進会議 事務局名簿
- ・ 資料3 横浜市子どもの貧困対策に関する計画推進会議運営要綱
- ・ 資料4 第1回計画推進会議の主な意見について
- ・ 資料5-1 平成28年度の取組状況について
- ・ 資料5-2 平成29年度予算案における取組について
- ・ 資料5-3 地域における子どもの居場所づくりサポートモデル事業の実施について
- ・ 資料5-4 地域ユースプラザ事業について
- ・ 資料5-5 子どもの学習支援・生活支援関連事業一覧

- ・ 資料 5-6 次期 5 か年(平成30～34年度)「横浜市ひとり親家庭自立支援計画」の策定について
- ・ 資料 5-7 施設等退所者現況調査の結果について(中間報告)